

# 横芝の碑

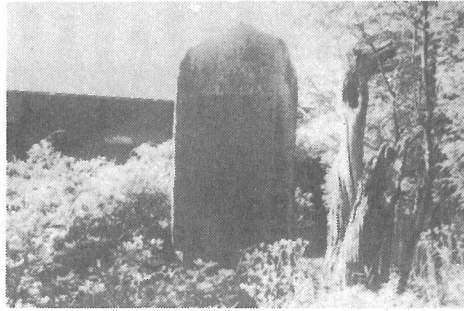
(その五十八)

## 父子二代に渡る教育者の碑

横芝町史六五八頁に「明治六年中台村、牛熊村は、中台伊藤三左衛門宅を借用して中台小学校を設立し、伊藤融および鈴木武左衛門を教員として、同年十月五日開校した。同八年当時、生徒数二九、教員は読書、習字二課、二等授業生伊藤融であった」と記されていますが、この伊藤融（とおる）先生は、このシリーズその四六で御紹介申上げた伊藤藤平翁の息子さんで、翁の薫陶宜しきを得た教育者としての功績は、中台円福寺境内の頌徳碑が良くそのことを伝えています。

先生は弘化三年（一八四四）中台伊藤藤平三男として生れましたが、幼い頃から勉強が好きで、林平翁が門人に講ずる傍に座って、その講議を覚え、十五才の頃には翁に代って門人に教えたりする程になりました。後縁あって、近くの伊藤羽左衛門宅の養子となりましたが、養家の奨めもあり、自分も好む道なので、そのまま父伊藤平翁の下に通い、門弟の教育を手伝い乍ら翁に俳諧を学び、また専門の学者に就いて和漢面文学を学ぶ等、饒まない勉強を続けていま

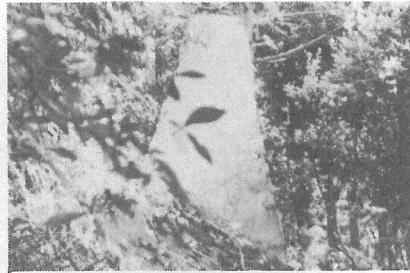
した。やがて明治六年の学制発布と共に町史に記されている通り、招かれて二等授業生となりました。以来、学制改革、学校統廃合等もありましたが、融先生は、都度その職を踏襲され、只管郷土の子弟良導に専念し、特に、卒業と共に学業を抛つ者の多いことを憐れ、当時の中心教課であった読、書、算盤に、俳句、詩歌等を折込み、卒



▲(1)伊藤融(とおる)先生の頌徳碑

業後の青少年が同好の士を求めて研究し合う様に仕向けて、その面影を見ていました。折柄、芭蕉門下の系統を持つ俳諧同好者も有ったこと等から、融先生の考えに慕い

集う青少年は村内全域に及びました。明治三十一年、既に五十一才を迎えられた先生は、大総尋常高等小学校訓導として教鞭をとっておられましたが、新学期の四月十一日病氣のために逝くなられました。先生逝去の報に、全村を挙げ



▲(2)先生他8名の俳句が刻まれている句碑

て悲しみ、生前の功績を稱え、遂に村葬の格式で之を送り、有志は村の内外を分たず相寄り、先生の頌徳顕彰の議は忽ちに決し、先生が逝くなられたその翌月、早くもこの頌徳碑は建立されたのです。写真(1)はその碑で扁額の頌徳碑とある下には、

伊藤先生碑、門人共同撰文

明治三十一年四月十一日旧大総村尋常高等小学校教員訓導伊藤融先生病没以村葬格葬之村長教員生徒及役場史員以下会者無算送葬之盛前無比馬一旧門弟等相議釀金建碑以欲報鴻恩而菑銘之者皆旧乞文銘之不如心門弟亦誠写真伝実縦令雖

不足表彰師德豈亦脊子思平回相與

議而撰之伝、先生名融字静堂號

汎瀾山武郡大総村中台人伊藤藤平

第三子也幼穎悟記長剛毅卓犖始就

文学句說後從森定輔今井静斎脩漢

学明治六年官制始布学制先生之拜

命授業生代父教授里間之子弟傍開

警枕学社薰陶壯丁壯丁家感化者多

矣既而教授之功大著遠近望風而來

学者日益加二十二年官領町村自治

制時村議不和而校舍不成先生深憂

之與其々輩調停最勤其校舍成也先

生之力居多矣爾後益教導子弟以老

体難堪之故不苟其職以恪勤數賜賞

又以年功賜恩給今茲四月罹病終歿



起享年五十五其在褥中也融一日不忌生徒之事却如不覺病在身亦足以

微其悲馬先生中年好俳詣就父極其

纏輿大有所造詣又從尾人市川湫村

修詩文頗其妙晚年又志歌道將升堂

入室惜哉先生嘗慨邑多坂路車馬之

艱募同志修之人德之銘曰、

南總之國 中台之郷 伊藤之氏

世出名良 先有正柯 今亦静堂

嗚呼堪頌 功德無弦

明治三十一年五月 應囑 北総

東皋高木堅、書並篆額

と刻まれています。刻文中の先有

正柯とある正柯とは林平翁の號で

父子二代に渡っての功績を稱えた

ものです。又背面には、寄附者と

して、大総学校教員一同、卒業生

一同、在校生一同、二川村、豊岡

村門弟連盟、その他、個人団体を

問わず、校の内外百件近い寄附者

名が刻まれているのも、先生の信

望を物語るものといえると思いま

す。写真(2)は同じ境内に建ってい

る句碑で、先生及び桜井芳太郎、

石橋嘉吉、鈴木恒造、同芳蔵、伊

藤藩一、同藤助、五木田善之助、

橘川七右衛門の皆さんが、明治二

十六年に熱海方面に旅行された時

の発句等が刻まれています。「こ

の辺りには、昔から芭蕉の流れを

くむ俳人随巢羽人が在り、つい先

年まで羽人第七世が存在していた

位で、多分藤平先生も、融先生も

その系統を継いでおられたと思わ

れる」ということです。この句碑

については、改めて御紹介する折

があれば、と考えています。

尚、頌徳碑は、元は角田桜山に

建っていたのを、三十年位前に、

先生の生家の方と、養子先の方で

相談し、費用切半でここに移動し

た。という和やかな話もお聞きし

ました。(本移取材に当り、同地

区の伊藤績夫さん、同融次さん、

石橋端夫さん方の御協力を戴きま

した) (小沢春光氏寄稿)